

魂のコミュニケーション —「銀河鉄道の夜」とダンテ『神曲』—*

山 田 耕 太

1. はじめに

宮沢賢治の代表作である「銀河鉄道の夜」は、今日では多くの日本人に親しまれている国民文学となっている。しかし、それは生前には出版されることがなかった未刊の書であるばかりでなく、宮沢賢治が1924年（28歳）頃に第一次稿を書き始めてから、1931年（35歳）頃に大幅に書き換えた第四次稿に至るまで何度も手を入れて書き直した未完成の書であった。本稿では「魂のコミュニケーション」という視点で「銀河鉄道の夜」を改めて取り上げてみたい。それは「銀河鉄道の夜」には、次の三つの段階で、魂のコミュニケーションが見られるからである。

第一に、「銀河鉄道の夜」の物語世界では、ジョバンニとカムパネルラの友情の物語が展開される。それは友人のザネリの身代わりとなって川で溺死して死者の国へ行ったカムパネルラの魂と生きたまま天上の世界に上げられたジョバンニの魂のコミュニケーションの物語となっている。すなわち、生の世界と死の世界を越えた魂のコミュニケーションである。このジョバンニとカムパネルラの生死を越えた友情の物語の伏線として、氷山に衝突して沈没した船の乗客の家庭教師の青年と姉弟の溺死の物語と蠅の自己犠牲の溺死の物語が語られる。こうして、生と死の世界を越えて本当の幸いとは何か、というテーマが展開されていく。⁽¹⁾

第二に、「銀河鉄道の夜」の物語世界の背景には、生者の国と死者の国を越えたジョバンニとカムパネルラの魂のコミュニケーションの物語を裏打ちする、宮沢賢治と最愛の妹トシの生死を越えた魂のコミュニケーションがあった。「銀河鉄道の夜」の物語世界を成立させる背景にはこの他にもタイタニック号の沈没事故や小学生の級友の豊沢川と北上川の合流点での溺死事故があった。「銀河鉄道の夜」の第一次稿を書き始めたのは、トシの死の翌年であるが、トシの死とその直後のトシとの魂のコミュニケーションについては『春と修羅』（1924年）で跡づけることができる。⁽²⁾

第三に、以下で詳述するように「銀河鉄道の夜」を構想する段階では、恐らく宮沢賢治はダンテ『神曲』を読んでさまざまな着想を得て、そこから自らの魂のコミュニケーションの経験に基づいて、ジョバンニの魂のコミュニケーションの物語を創作したと思われる。もしそうであれば、構想の段階で宮沢賢治とダンテの間で魂のコミュニケーションがあっ

たと思われる。本稿では、以下でこの第三の宮沢賢治とダンテについて詳しく検討したい。

2. 「銀河鉄道の夜」の構想

宮沢賢治の最愛の妹トシの死については、『春と修羅』の「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」に克明に記されている。

「永訣の朝」では、熱にあえぐトシは死の直前に雨雪を取って来てくれるように賢治に願う。それに応えて賢治はトシの天上の世界での聖なる食べ物となるように願う。ここには「銀河鉄道の夜」の世界に見られる「銀河」「太陽」「気圏」というキー・ワードばかりでなく、死者の世界に一人で旅立つテーマと共に「すべてのさいはひ」という中心的なテーマが見られる。

けふのうちに
とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ
(あめゆじゆとてちてけんじや)
・・・・・・・・(略)・・・・・・・・
はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから
おまへはわたくしにたのんだのだ
 銀河や太陽、気圏などとよばれたせかいの
 そらからおちた雪のさいごのひとわんを……
・・・・・・・・(略)・・・・・・・・
おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまこころからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになつて
おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ⁽³⁾

「松の針」では、みぞれを取ってきた松の枝を頬にあてて、松の枝の香りを通して林を慕うトシの最後の様子を描く。ここでは「銀河鉄道の夜」での死者の世界への旅に「同行する」というモチーフが芽生えている。

ああけふのうちにとほくへさうとするいもうとよ
ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか
わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ

泣いてわたくしにさう言つてくれ⁽⁴⁾

「無声慟哭」では、賢治より先に死後の世界へ行こうとするトシとの別れの瞬間に、トシの天上の世界での再生を願う。ここには「銀河鉄道の夜」で交わされる死後の世界に再生した魂とのコミュニケーションへの導入がほのめかされている。

わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき
おまへはじぶんにさだめられたみちを
ひとりさびしく往かうとするか
・・・・・・・・（略）・・・・・・・・
まるでこどもの^{りんご}苹果の頬だ
どうかきれいな頬をして
あたらしく天に生まれてくれ⁽⁵⁾

このような天上の世界に一足先にトシを送った賢治は、やがて「風林」で「ただひときれのおまへからの通信が／いつか汽車のなかでわたくしにとどいただけだ」⁽⁶⁾と記しているように、死者の国のトシからのコミュニケーションを受け取るという宗教的で神秘的な体験をする。「オホーツク挽歌」「青森挽歌」「樺太」「鈴谷平原」「噴火湾（ノクターン）」と列車の車窓を眺めながら現実の風景と二重写しで、現実を越えた世界に往ったトシの足跡をインスピレーションとイマジネーションによって追憶する。

例えば、「青森挽歌」では、現実を越えた光の交錯する世界への上昇が次のように描写されているが、「銀河鉄道の夜」での天気輪の柱の場面での天の世界への上昇に対応する。

それらひとのせかいのゆめはうすれ
あかつきの薔薇いろをそらにかんじ
あたらしくさはやかな感官をかんじ
日光のなかのけむりのやうな^{うすもの}羅をかんじ
かがやいてほのかにわらひながら
はなやかな雲やつめたいにほひのあひだを
交錯するひかりの棒を過ぎり
われらが上方とよぶその不思議な方角へ
それがそのやうであることにおどろきながら
大循環の風よりもさはやかにのぼつて行つた
わたくしはその跡をさへたづねることができる⁽⁷⁾

しかし、天上の世界の旅でのさまざまなエピソードが具体的に織り込まれた「銀河鉄道の夜」の複雑な構造を持った豊穣なイマジェリーの世界と『春と修羅』でのトシの死後の世界を垣間見た断片的で漠然としたクロッキーのような素描の間には、極めて大きな乖離がある。しかも、『春と修羅』の出版と「銀河鉄道の夜」の第一次稿の執筆がほぼ同時期であることから、宮沢賢治が「銀河鉄道の夜」という宇宙の果てまでをジョバンニとカムパネルラが銀河鉄道で旅する壮大なスケールのファンタジー文学を構想する際に、このように大きな乖離を埋めるために、何か文学的モデルを念頭において刺激を受けたのではないかという問いに導かれる。それは一体何であったのだろうか。

3. 「銀河鉄道の夜」とイタリア文学

「銀河鉄道の夜」では、キリスト教色が前面に出され、ジョバンニやカムパネルラというイタリア人名が主人公とその最愛の友人に用いられているので、イタリア文学と関係が深いということは想像に難くない。宮沢賢治は盛岡高等農林（岩手大学農学部的前身）で農芸科学や化学を学ぶためにドイツ語を学んだが、ドイツ文学からもインスピレーションを受けていたことが、『春と修羅』で「心象スケッチ」を描いた詩に見ることができる。⁽⁸⁾しかし、最も興味を持って自らしばしば上京してまで学んだ外国語はエスペラント語であった。⁽⁹⁾エスペラント語はポーランドのユダヤ人ザメンホフが19世紀に発明した人工の理想的な共通言語であるが、ラテン語を基礎にして簡便化して創った言語であるので、そこからイタリア語やイタリア文学へ至る道は遠くない。

16世紀のイタリア人文主義者のトマーズ・カンパネッラ（1568年生～1639年没）は『太陽の国』（Civitas Solis）⁽¹⁰⁾で、トーマス・モアの『ユートピア』（1516年）の影響で理想的な国家を描いた。「銀河鉄道の夜」の構想は『太陽の国』に基づいている、⁽¹¹⁾という説は、「カムパネルラ」という名前にあまりにも囚われ過ぎており、銀河の世界を旅する二人を中心に描く「銀河鉄道の夜」の物語構造とはかけ離れている点を見逃している。もちろん、宮沢賢治が「イーハトーヴォ」というファンタジーの世界で理想郷を築くことに最大の関心を注いでいたので、「カムパネルラ」という名前を『太陽の国』の著者から取った可能性は否定できない。恐らく大西祝の『西洋哲学史 下巻』（1905年）を読み、そこから「カムパネルラ」という名前を取ったと考える方が正しいであろう。この書のみが、“Campanella”を「カムパネッラ」と表記し、他の書物は「カンパネラ」と表記していたからである。

それよりも14世紀のイタリア・ルネサンスの巨匠ダンテ・アリギエリ（1263年生～1321年没）の壮大な神聖喜劇である『神曲』を読んで着想を得たと考える方が、さまざまな点で蓋然性が高い。宮沢賢治自身は「ダンテ」や「神曲」という文字をどこにも書き

残していない。しかし、ダンテの影響下で最愛の人ラウラへの愛の抒情詩を『カンツォニエーレ』で歌ったルネサンスの巨匠フランチェスコ・ペトラルカ（1304年生～1374年没）の名前を「雨ニモ負ケズ手帳」に「おお、ペトラルカ」⁽¹²⁾と記していることから、イタリア・ルネサンス文学への関心と敬意の念が深かったことが跡づけられる。

そればかりでなく「銀河鉄道の夜」の主人公の「ジョバンニ」という名前は、ダンテとも密接に関係する。「ジョバンニ」は「洗礼者ヨハネ」⁽¹³⁾とも「使徒ヨハネ」あるいは「黙示録の著者ヨハネ」⁽¹⁴⁾とも理解できるが、⁽¹⁵⁾ 洗礼者ヨハネはダンテの町フィレンツェの守護聖人であるばかりでなく、⁽¹⁶⁾ ダンテ自身もフィレンツェの聖洗礼者ヨハネ堂の洗礼盤から幼児洗礼を受けたのである。⁽¹⁷⁾ 『神曲』の「天国篇」でも「ジョバンニ」すなわち「愛の使徒」⁽¹⁸⁾「ヨハネ」は「愛」についてダンテに試問する重要な役割を演じる。⁽¹⁹⁾ また、「鷲」はローマ帝国の旗に記された「神の鳥」の象徴であるが、⁽²⁰⁾ 「キリストの鷲」として「ジョバンニ」のシンボルとしても登場する。⁽²¹⁾ 宮沢賢治は短歌を詠み始めた盛岡中学2年の14歳の最初期の作品の中で、洗礼者ヨハネについての歌を詠んでおり、洗礼者ヨハネに対する関心が若い時から深かったことが跡づけられる。⁽²²⁾

4. 「銀河鉄道の夜」とダンテ『神曲』の研究史

「銀河鉄道の夜」に『神曲』の影響を見る先行的な研究は、既にいくつかある。第一に、新倉新一「宮沢賢治と夢物語—『神曲』的幻想空間」⁽²³⁾は、「銀河鉄道の夜」をキケロの「スキピオの夢」や『神曲』と同じく「眠りに落ちた主人公が自分の見たヴィジョンを語る『夢物語』文学」で「天界のヴィジョンの物語」と位置づける。また、主人公のジョバンニが黙示録の著者のヨハネのイタリア人名であることから、「銀河鉄道の夜」は「キリスト教的なヴィジョンの夢物語の系譜に属する」と分類する。さらに、「銀河鉄道の夜」の巡礼の旅のヴィジョンと『神曲』「天国篇」の宇宙論とのいくつかの共通なモチーフを指摘する。

第二に、上田哲『宮沢賢治—その理想世界への道程』「賢治作品へのカトリシズムの影響Ⅰ」⁽²⁴⁾は「銀河鉄道の夜」が、パウロの第三の天にまで上げられた黙示的経験（Ⅱコリント12：2）やヨハネ黙示録、あるいは中世の神秘家の“visio”（幻視）によって天国に行った話と同類の神秘的体験に基づいた、「幻視文学」であると位置づけ、⁽²⁵⁾ 『神曲』もこのジャンルに属することが前提にされている。「十字架」「ハルレヤ」⁽²⁶⁾「讃美歌」「カトリック風の尼さん」「クリスマストリイ」ばかりでなく「ばら」「橄欖」「孔雀」「ラッパ」「ほんたうの神様」論争などが、キリスト教的描写であり、天国の描写で用いられる宝石や「水晶のように輝く命の川」がヨハネ黙示録（21:11、18-21；22:2）や『神曲』「天国篇」（第30歌）に見られるモチーフであり、とりわけ「光の十字架」の描写が『神曲』「天国篇」（第14、15、18曲）の影響であることを指摘する。

第三に、渡辺福實「宮沢賢治とダンテ宇宙論をめぐって」⁽²⁷⁾は、『春と修羅』の冒頭の詩と『神曲』「地獄篇」第1歌冒頭部分を比較して、「暗い林」と「遊星の光」の対比が「地獄篇」と「天国篇」の対比であることを示唆しながら、「ダンテの冒頭の部分がこれから展開される『神曲』の旅の序幕であるのと同様に、賢治のこの短い詩「春と修羅」も「銀河鉄道の夜」その他の作品の序詞である」とする。また、「銀河鉄道の夜」の宇宙論と『神曲』やブレイクやイエイツの宇宙論を比較しながら「賢治とダンテのイメージの描写に見られる相似た感受性、混沌から秩序へという衝動のもとに自らの宇宙論を築こうとする幻想的な想像力、そういった二人の共通性を指摘」する。

第四に、矢野弥生「銀河鉄道の沿線に暮らす人々―ダンテ『神曲』「煉獄篇」を中心に」⁽²⁸⁾は、周辺の人々である「鳥捕りや燈台守り、大学士、インディアンなど」に注目する。そして『神曲』「煉獄篇」（第3歌136-138行、第4歌130-132行、第11歌70-72行、122-126行、第19歌121-126行）に示唆されて、『煉獄篇』の人々は、神の得心がいくまで（罪が清められるまで）同じ場所にとどまり、罪を償っていること」から、彼らは「銀河鉄道に乘客として乗って『天上』を目指したいのだが、その前にまずはこの地へとどまり、生活することで、罪が清められるのを（『天上』へいくことのできる切符が与えられるのを）待っているのだ」と解釈する。

以下では、このような先行的な研究でのさまざまなモチーフの類似性という視点からではなく、「銀河鉄道の夜」と『神曲』の文学的構造上での類似性を指摘したい。

5. 「銀河鉄道の夜」とダンテ『神曲』の文学的構造の比較

(1) 作品全体の構成

『神曲』は、「地獄篇」「煉獄篇」「天国篇」の三部で構成されているが、「煉獄篇」と「天国篇」は33曲で「地獄篇」は始めに全体の序曲が加わり34曲で構成され、全体で100曲を成している。それぞれの曲は、「テルツァ・リーマ」と呼ばれる三行詩⁽²⁹⁾による韻文で書かれ、各曲は140行前後で構成されている。主人公のダンテは「地獄」「煉獄」「天国」の三界を巡って、再び地上のイタリアに戻る。⁽³⁰⁾

「銀河鉄道の夜」は、散文で書かれているが、地上のつらい現実の世界を描いた「午后の授業」「活版所」「家」「ケンタウル祭の夜」の導入部、「天気輪の柱」で天上の世界に上げられ象徴的なエピソードが展開する「銀河ステーション」「北十字とプリオシン海岸」「鳥を捕る人」「ジョバンニの切符」（主要部分）という星めぐりの旅をする本論、「ジョバンニの切符」の末尾で再び地上の現実世界に戻ってくる結論部で構成されている。

星めぐりの旅を描写した「銀河鉄道の夜」の本論は、『神曲』「天国篇」と明らかに対応している。しかも宮沢賢治と同様に「星」を愛好するダンテは、『神曲』で「星」を強調して、「地獄篇」「煉獄篇」「天国篇」のいずれも最後の曲の最後の行は「星」(stelle)と

いう単語で終わらせる。⁽³¹⁾

(2) 時間的構造

『神曲』の「地獄」めぐりの旅は、ダンテがフィレンツェの行政官プリオリの一人に選出された35歳の時の1300年の聖金曜日の前夜から始まり、復活祭の朝には「煉獄」に入り、三昼夜半を費やして翌週木曜日の正午には「天国」に至り、星めぐりの旅を半日で終える。こうして、すべての出来事が4月8日の聖金曜日から翌週の4月14日の木曜日までの一週間の出来事として描かれている。

「銀河鉄道の夜」は銀河系の祭りであるケンタウル祭の日の「午後の授業」から始まり、すべてが一日の出来事として描かれている。北十字から南十字への星めぐりの旅は午後6時に「活版所」での仕事を終えた後にすっかり暗くなった時から始まり、白鳥駅に午後11時に着き、鳥の信号手を過ぎた小さい駅に「第二時」⁽³²⁾に着き、サザンクロス駅に「第三時」に到着する半日の出来事として描かれている。

「銀河鉄道の夜」の星めぐりの旅は、『神曲』の復活祭に対応して銀河系のケンタウル祭の日に始まり、天上での星めぐりの旅はそれぞれ半日の旅として構成されている。

(3) 空間的構造

『神曲』「天国篇」は、地球を中心にしてプトレマイオス的な「七つの遊星天」⁽³³⁾「恒星天」⁽³⁴⁾「原動天」(プリーマ・モビーレ)⁽³⁵⁾「エムビレオ」⁽³⁶⁾という十層の天蓋で構成された宇宙論を前提にしている。すなわち、地球に近い所から、誓いを果たせなかった諸霊が宿る「月天」、⁽³⁷⁾世の栄誉を求めた諸霊が宿る「水星天」、⁽³⁸⁾恋に燃えた諸霊が宿る「金星天」、⁽³⁹⁾哲学者や神学者という賢者の諸霊が宿る「太陽天」、⁽⁴⁰⁾「光の十字架」と信仰の戦士の諸霊が宿る「火星天」、⁽⁴¹⁾正義の諸霊が宿る「木星天」、⁽⁴²⁾黙想者の諸霊が宿る「土星天」⁽⁴³⁾という「七つの遊星天」がある。その上に、「キリストの凱旋」と「ペトロ・ヤコブ・ヨハネの試問」によって描写される諸聖徒が集まる第八天の「恒星天」、⁽⁴⁴⁾諸天使たちが集合して仕える所である第九天の「原動天」(プリーマ・モビーレ)、⁽⁴⁵⁾そして神の御座がある至高天である「エムビレオ」である。⁽⁴⁶⁾

「銀河鉄道の夜」の本論で「ほんたうの幸い」のテーマは、「北十字とプリオシン海岸」で「おっかさんは僕をゆるして下さるだろうか」というカムパネルラの唐突な問いから始まるが、母親を幸せにするという「誓いを果たせなかった者」⁽⁴⁷⁾の言葉として響いている。それぞれ「信仰」と「科学」を象徴する、一方の北十字で「光の十字架」⁽⁴⁸⁾を礼拝する人々は「信仰の戦士」⁽⁴⁹⁾に対応し、他方の天の川原で化石を発掘する大学士は中世の哲学者や神学者という「賢者」⁽⁵⁰⁾に対応する。氷山に衝突して水死した姉が語る自己犠牲を願って赤く輝く星になった「蠍の話」⁽⁵¹⁾は、人類の罪のために贖罪の業を成し遂

げた十字架の上に輝く「キリストの凱旋」⁽⁵²⁾に、それに続く「ほんたうの神さま」論争は信仰・希望・愛を問う「ペトロ・ヤコブ・ヨハネの試問」⁽⁵³⁾に対応する。そして、銀河鉄道の乗客はサザンクロス駅で降りて神を礼拝し、ジョバンニは彼らと別れて「ほんたうの天上」を目指していくが、それらはそれぞれ諸天使の集う「プリーマ・モビーレ」⁽⁵⁴⁾と「エムビレオ」⁽⁵⁵⁾に対応し、カンパネルラが「ほんたうの天上」に垣間見た「母の顔」は「エムビレオ」で輝く「聖母マリアの栄光」⁽⁵⁶⁾に対応する。

このように「銀河鉄道の夜」でジョバンニとカムパネルラが「ほんたうの天上」を目指す星めぐりの旅の行程は、『神曲』「天国篇」の「七つの遊星」「恒星天」「プリーマ・モビーレ」「エムビレオ」へと向かう上昇の旅に対応している。

(4) 主な登場人物

『神曲』の主人公はダンテであるが、「地獄篇」「煉獄篇」では理性・知識を象徴するローマの詩人ウェルギリウスがダンテの導き手で同伴者であり、「天国篇」では愛を象徴する最愛の女性ベアトリーチェが導き手であり同伴者として登場する。しかし、「煉獄篇」で最後の「地上の楽園」の場面では同伴者がウェルギリウスから女性のミティルダに変わるように、「天国篇」においても最後の「エムビレオ」において同伴者のベアトリーチェの姿が見えなくなり、瞑想を象徴するばかりでなく聖母マリアの熱烈な崇拝者としても有名なベルナルドゥスに導き手は交替する。

ダンテは9歳の時にほぼ同じ年のベアトリーチェに出会い、18歳の時に再会するが、それ以来ダンテはベアトリーチェとの恋の悩みに陥った。しかし、ベアトリーチェは1290年に24歳の若さで亡くなってしまうが、ダンテは1292年から1294年の間にベアトリーチェを追憶した抒情詩と散文によって最初の作品『新生』を著作した。『神曲』は『新生』と密接に関係し、その愛のテーマに正義というテーマを加えて発展させたものだが、その壮大なスケールの世界の創作には、トマス・アキナスの神学を土台にして、聖書とギリシア・ローマ文学の伝統を融合して採り入れている。

「銀河鉄道の夜」の主人公のジョバンニは、最愛の友のカムパネルラを同伴者として銀河系の星めぐりの旅をするが、銀河鉄道の乗客と別れて「ほんたうの天上」を目指して行く時に、カムパネルラの姿が見えなくなり、たった一人に取り残される。

宮沢賢治が26歳の時に二歳年下の最愛の妹トシは亡くなるが、トシを追憶したいくつかの詩を『春と修羅』の中で「無声慟哭」というにタイトルの下に収めて出版する。「銀河鉄道の夜」はこれらの一連の詩と密接に関係して発展させたものである。その広大な世界の創作には、キリスト教文学の伝統を採用して、仏教思想とキリスト教思想という東西宗教思想の統一ないしは融合を目指している。

このように『神曲』が『新生』の展開として密接に関係するように、「銀河鉄道の夜」

は『春と修羅』『無声慟哭』の一連の詩の発展として密接に関係する。そして、「銀河鉄道の夜」の天上の旅の主人公ジョバンニと同伴者カムパネルラは、『神曲』『天国篇』の主人公ダンテと同伴者ベアトリーチェと密接に関係する。また、両者の同伴者カムパネルラとベアトリーチェは、旅の最後には姿を消す。『神曲』でも「銀河鉄道の夜」でも、主人公のダンテとジョバンニは、同伴者を含めて死後の人間の魂の住む異界を旅する。『神曲』『天国篇』では死者の魂は星となって登場するが、⁽⁵⁷⁾「銀河鉄道の夜」でも光に充ちた星の世界は死者の魂であることが前提にされている。

(5) テーマ

ダンテはカン・グランデ・デラ・スカラ宛書簡の中で『神曲』は字義的にも^{アレゴリー}寓喩的にも解釈できると述べ、単に字義的に解釈すれば人間の死後の世界を描いたものであるが、寓喩的に解釈すれば人間の自由意志による善悪の行為に従って正義の賞罰を受けることを描いたものと記す。そして「地獄篇」「煉獄篇」「天国篇」を一貫する全編のテーマは、この世に生きている人々を、悲惨な状態から幸福な状態に導くことであると述べる。⁽⁵⁸⁾『神曲（すなわち「崇高なる喜劇」）』（Divina Commedia）というタイトル自体はその内容から後から付けられたものであり、ダンテ自身は単に『喜劇』（Commedia）としか呼ばず、⁽⁵⁹⁾また1555年までタイトルは『ダンテ・アリギエリによる喜劇』（La Commedia di D.A.）としか称されなかった。それは中世の習慣に従って「不幸」から始まり「幸福」至る内容という点と書かれた言語が聖なるラテン語ではなく俗なるイタリア語であったという点による。⁽⁶⁰⁾また、『神曲』の正義論と表裏一体をなす幸福論のキー・コンセプトは、最愛の人ベアトリーチェの存在に象徴されるように、すべてのものを動かす神的な「愛」である。⁽⁶¹⁾

「銀河鉄道の夜」のテーマは、ジョバンニの地上での生活と天上での旅を通して見聞した生死を通して求道者のように「ほんたうの幸い」とは何かを求めて生きることである。そして「ただ一人の幸い」ではなく、「みんなの幸い」を求めて、銀河系という壮大な共同体全体の幸いを求めることを示唆する。また、そこに見られるキー・コンセプトも自己犠牲の「愛」である。⁽⁶²⁾

6. 「銀河鉄道の夜」とダンテ『神曲』の受容史

以上で詳論したように、「銀河鉄道の夜」は『神曲』との構造上の類似性から見て、「銀河鉄道の夜」を構想した段階で、宮沢賢治は少なくとも『神曲』の内容・構造・目的を知っており、モチーフも加えたおびただしい類似点から、『神曲』を読んだと類推できる。反対に『神曲』との相違点は、宮沢賢治のユニークな特徴であると同時に、パロディ化している点や反対の主張をしている点と考えるとよいであろう。だが、宮沢賢治はどのように

して『神曲』を読んだのであろうか。

日本で最初にダンテについて言及したのは内村鑑三である。札幌農学校で芽生えたりペラル・アーツ教育をアムースト大学で発展させて帰国した内村鑑三は、北越学館教頭を辞した後に第一高等学校で不敬事件を起こした1891年の年末に「ダンテとゲーテ」⁽⁶³⁾を発表した。やがてそれを発展させて1895年に大論文「如何に大文学は出ざる乎」⁽⁶⁴⁾と「如何にして大文学を得ん乎」⁽⁶⁵⁾によって、日本に聖書・ホメロス・ダンテ・シェークスピア・ゲーテ・ミルトンなどに代表される大文学が出ない理由と出るために必要なことをカーライルの「英雄論」の影響下で説いた。内村鑑三の論文は社会一般にも影響力があったが、とりわけ無教会の中では藤井武⁽⁶⁶⁾や矢内原忠雄⁽⁶⁷⁾を代表にして『神曲』が熱心に読まれていった。⁽⁶⁸⁾宮沢賢治は花巻の無教会信者の斉藤宗次郎を通して内村鑑三にも通じており、⁽⁶⁹⁾おそらくダンテへの憧憬が与えられたと思われるが、『神曲』を読んだのは無教会のルートではない。

ダンテを本格的に紹介したのは、1901年の上田敏の解説書・研究書『詩聖ダンテ』が最初である。⁽⁷⁰⁾また、1902年に森鷗外訳のアンデルセン『即興詩人』でダンテが紹介され、⁽⁷¹⁾1903年に繁野天来はダイジェスト版で『神曲』の内容を紹介した。⁽⁷²⁾上田敏は英文科教授として京都帝国大学でダンテを講じており、1911年に政府の文芸委員会から『神曲』の全訳を命じられるが、訳業の半ばにして1916年に亡くなり、『海潮音』の文体による「地獄篇」の一部の未完の訳が1918年に出版された。⁽⁷³⁾宮沢賢治は詩人の上田敏にも関心を寄せていたのではないかと思われるが、『神曲』を読んだのは未完の訳の京大ルートでもない。

1921年はダンテ没後600年の記念すべき年であったが、大正デモクラシーの潮流とも重なって、『神曲』の翻訳書と研究書が日本でもこの年の前後数年に集中的に出版され、ダンテ・ルネサンスとも言うべき状況が出現していた。⁽⁷⁴⁾

第一に、北越学館出身で東北学院を出た後、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校と太平洋神学校に7年間留学し、ヨーロッパの言語と文学（特に中世文学）を学び、帰国後に『神曲』翻訳に従事して、東北学院大学英文科教授となった山川丙三郎である。⁽⁷⁵⁾山川丙三郎は1914年に「地獄篇」を、1917年に「浄火篇」（すなわち「煉獄篇」）を、1922年に「天堂篇」（すなわち「天国篇」）を次々に英訳も参照しながらイタリア語から正確に文語訳で翻訳していった。⁽⁷⁶⁾

第二に、明治学院を卒業して日本基督教会の伝道者であり後に母校のチャプレンをすると同時に、ヨーロッパの思想文学の紹介者としてダンテ『神曲』ばかりでなく、アウグスティヌス『懺悔録』『神の都（神の国）』、トマス・アケンピス『基督に倣ひて』、カルヴァン『基督教綱要』、バンヤン『天路歷程』などを全訳した中山昌樹である。中山昌樹は山川丙三郎と競って『神曲』を翻訳したが、東京外国語学校の夜学で学んだイタリア語も参

照しながら主に英訳に基づいて口語訳で1917年に『神曲・地獄篇、煉獄篇、天国篇』の三冊を一挙に出版した。⁽⁷⁷⁾ さらに、1924年には上田敏の著作と同じタイトルの『詩聖ダンテ』と『ダンテ神曲の研究』という研究書を次々に著した。これらの翻訳書・研究書は、『新生』『饗宴』など他のダンテの著作の翻訳と共に1925年に『ダンテ全集』全10巻に収められて出版された。⁽⁷⁸⁾

第三に、同志社から京都帝国大学に入り、上田敏の下で『神曲』を学んだ弟子の黒田正利である。黒田正利は上田敏の亡き後も、ダンテ文献収集家の大賀寿吉の支援により、1921年にイタリア学への造詣を深めた『ダンテと其時代』と『ダンテ研究』という大著を出版してダンテ研究を切り開いた。⁽⁷⁹⁾ 恐らくこの京大ルートの延長も宮沢賢治とは深く繋がらなかったであろう。

宮沢賢治が『銀河鉄道の夜』の第一次稿を書き始めたと推定される1924年以前の状況は、ダンテ没後600年の1921年を中心にして、読書界には以上のようなダンテ・ブームが起こっている最中であった。恐らく宮沢賢治は山川丙三郎の文語訳か、中山昌樹の口語訳の『神曲』を読んで、さまざまなインスピレーションを受けて、『銀河鉄道の夜』を構想していったと推測される。もし、以上の考察が正しければ、宮沢賢治がダンテの『神曲』を読んだのは、『春と修羅』を出版する前後で、『銀河鉄道の夜』の第一次稿を書く前の1924年頃のことであったと思われる。尚、この他に戦前には生田長江訳⁽⁸⁰⁾ 戦後には上田敏の弟子の竹友藻風訳、⁽⁸¹⁾ 平川祐弘訳、⁽⁸²⁾ 三浦逸雄訳、⁽⁸³⁾ 野上素一訳、⁽⁸⁴⁾ 寿岳文章訳、⁽⁸⁵⁾ と続き、『神曲』の全訳が八種類ある世界でも稀な現象が生じた。また、ダンテ研究はイタリア学が進歩して一段と深化していった。こうしてダンテは、聖書・ホメロス・シェークスピア・ゲーテ・ミルトンなどとともに、日本人の教養になっていった。

宮沢賢治はトシとの魂のコミュニケーションの経験に基づいて、ジョバンニとカムパネルラの魂のコミュニケーションを中心とする『銀河鉄道の夜』を構想する段階で、ダンテの『神曲』を読み、ダンテと魂のコミュニケーションを深めたと思われる。だが、ダンテ自身も最愛の人ベアトリーチェとの魂のコミュニケーションの経験を踏まえて『神曲』の物語世界を創作している。そこにおいてもダンテとの魂のコミュニケーションを深める契機があったと思われる。さらに細かく言えば、宮沢賢治は『神曲』を日本語訳で読んだと思われるが、ダンテとの魂のコミュニケーションには、翻訳を通して訳者の魂に触れざるを得ないので、訳者との魂のコミュニケーションも含まれている。

* 本稿は2005年7月13日に豊栄市公民館で行なった豊栄オープン・カレッジでの講演「魂のコミュニケーション：宮沢賢治とダンテ『神曲』」に基づいているが、大幅に書き改めたものである。2006年3月1日に三条市公民館で行なった三条オープン・カレッジでの講演も本稿と同じ演題で行なった。尚、本稿は「宮沢賢治とキリスト教」『新潟キリスト教史研究』第6号（1997年）、1-37頁、ならびに『銀河鉄道

の夜』における死と生」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第3号（2005年）、73-87頁、の続編である。

註

- (1) 山田耕太『『銀河鉄道の夜』における死と生』、78-83頁、参照。
- (2) 山田耕太『『銀河鉄道の夜』における死と生』、83-84頁、参照。
- (3) 「永訣の朝」『春と修羅』筑摩書房版『新校本 宮澤賢治全集』第2巻、138-140頁。
- (4) 「松の針」『春と修羅』『新校本 宮澤賢治全集』第2巻、142頁。
- (5) 「無声慟哭」『春と修羅』『新校本 宮澤賢治全集』第2巻、143-144頁。
- (6) 「風林」『春と修羅』『新校本 宮澤賢治全集』第2巻、148頁。
- (7) 「青森挽歌」『春と修羅』『新校本 宮澤賢治全集』第2巻、163-164頁。
- (8) 植田敏郎『宮沢賢治とドイツ文学』講談社学術文庫、1994年、参照。
- (9) 野島安太郎『宮沢賢治とエスペラント』リーベロイ社、1996年、参照。
- (10) 日本語の初訳は、守田有秋訳『社会思想全集』第1巻、平凡社、1929年。現在では近藤恒一訳の岩波文庫（1992年）で容易に読むことができる。
- (11) 小野隆祥『宮沢賢治の思索と信仰』秦流社、1979年、262-263頁。
- (12) “O Petrarca”（『新校本 宮沢賢治全集』第13巻上、577頁）の“O”は、ここではペトラルカのイニシャル“F”の記憶違いと考えるのではなく、感嘆詞であると理解する。
尚、池田廉訳ペトラルカ『カンツォニエーレ』名古屋大学出版会、1992年、参照。
- (13) 『神曲』「地獄篇」第4曲52-63行、「天国篇」第18曲133-135行、第32曲31-33行。
- (14) 『神曲』「煉獄篇」第29曲103-105行。
- (15) 『神曲』「天国篇」第4曲28-30行。
- (16) 『神曲』「地獄篇」第13曲142-144行、「天国篇」第16曲25-27行。
- (17) 『神曲』「地獄篇」第19曲16-21行、「天国篇」第15曲133-135行。
- (18) ヨハネ福音書15-17章、第一ヨハネ書4章。
- (19) 『神曲』「天国篇」第26曲。
- (20) 『神曲』「天国篇」第6曲1-6行。
- (21) ヨハネ黙示録4:7、『神曲』「天国篇」第26曲52-54行。「銀河鉄道の夜」の星めぐりの旅での鷺座の驚駭に注目。
- (22) 「ひがしぞら／かゞやきませど丘はなほ／うめばちさうの夢をたちつ／／ひとびとに／おくれてひとり／たけたかき／橘川先生野を過ぎりけり／／追ひつきおじぎをすれば／ふりむける／先生の眼はヨハネのごとし」（『新校本 宮沢賢治全集』第1巻、104頁）。
- (23) 新倉新一「宮沢賢治と夢物語—『神曲』的幻想空間」『星座』第6号（1984年7月）、矢立出版、17-25頁。
- (24) 上田哲『宮沢賢治—その理想世界への道程』明治書院、〔1984年（初版）〕1991年（改訂版）、188-215頁。
- (25) ヨハネ黙示録とダンテ『神曲』の間の「幻視文学」（vision literature）については、cf. Eileen Gardiner (ed.), *Visions of Heaven & Hell Before Dante*, New York: Italica Press, 1989. ヨハネ黙示録以前の「黙示文学」では、ダニエル書7-12章、エゼキエル書、エノク書（エチオピア語）などが重要である。

- (26) 「ハルレヤ」は「ハレルヤ」を振った表現。ヨハネ黙示録19章(19:1、3、4、6)や『神曲』『地獄篇』第12曲88-90行、「煉獄篇」第30曲13-15行などでも神を讃える「ハレルヤ」ないしは「アレルヤ」の讃美が響き渡る。
- (27) 渡辺福實「宮沢賢治とダンテ—宇宙論をめぐる」『国学院雑誌』第90巻11号(1989年11月)、241-253頁。
- (28) 矢野弥生「銀河鉄道の沿線に暮らす人々—ダンテ『神曲』『煉獄篇』を中心に」『注文の多い土佐料理店』(高知大学宮沢賢治研究会)第3号(2000年)；
<http://www.kochi-u.ac.jp/~ksuzuki/kaishi/3rd/ron.htm>
- (29) 11綴音が三行で一組になり、中央の行の韻で互いに連絡して、最終行は最後の韻を踏む。すなわち、aba、bcb、cdc、……xyx、zyyzとなる。
- (30) 『神曲』『天国篇』第27曲79-87行。
- (31) 『神曲』『地獄篇』第34曲139行「かくてこの処をいでぬ、再び諸々の星をみんとて」、「煉獄篇」第33曲143行「清くして、諸々の星にいたるにふさわしかり」、「天国篇」第33曲145行「日やすべての星を動かす愛に」(山川丙三郎訳)。
- (32) 「第二時」「第三時」はそれぞれ「午前2時」「午前3時」とも受け取れるが、古代や中世では、日の出を「第一時」として数える習慣があった。これに従うと「第二時」「第三時」はそれぞれ「午前8時」「午前9時」頃となる。
- (33) ヨハネ黙示録1-3章の「七つの星」「七つの霊」などは「七つの遊星(すなわち惑星)」を指す。
- (34) ヨハネ黙示録6:13、8:10、9:1には「七つの遊星」とは異なる星の存在が前提にされているが、ダンテの「恒星天」に相当する。
- (35) 「原動天(プリーマ・モビーレ)」はアリストテレスの「第一動者」(すなわち、アリストテレスの神)に由来する。ダンテの宇宙論が基礎とするトマス・アキナスの神学はアリストテレスの哲学を採用してキリスト教化している。
- (36) ヨハネ黙示録4-5、7、14、19章の「神の御座」での天上での礼拝はダンテの「エムビレオ」に相当する。あるいはパウロの「第三の天」(Ⅱコリント12:2)すなわち「七つの遊星天」「恒星天」の上の「至高天」も「エムビレオ」に相当する。
- (37) 『神曲』『天国篇』第2～5曲。
- (38) 『神曲』『天国篇』第5～7曲。
- (39) 『神曲』『天国篇』第8～9曲。
- (40) 『神曲』『天国篇』第10～14曲。
- (41) 『神曲』『天国篇』第14～18曲。
- (42) 『神曲』『天国篇』第18～20曲。
- (43) 『神曲』『天国篇』第21～22曲。
- (44) 『神曲』『天国篇』第22～27曲。
- (45) 『神曲』『天国篇』第27～29曲。
- (46) 『神曲』『天国篇』第30～33曲。
- (47) 『神曲』『天国篇』第2～5曲。
- (48) 『神曲』『天国篇』第14曲94-102行、109-111行、第15曲19-24行。
- (49) 『神曲』『天国篇』第14～18曲。
- (50) 『神曲』『天国篇』第10～14曲。

- (51) ヨハネ黙示録(9:3、5、10)と『神曲』(『地獄篇』第17曲25-27行)では、蠍は地獄の王の下で仕える否定的な存在であるが、宮沢賢治は「よだかの星」のテーマと関連して自分の好きな蠍座の赤星アンタレスのイメージを重ね合わせて極めて肯定的なイメージに変えている。
- (52) 『神曲』『天国篇』第23曲。
- (53) 『神曲』『天国篇』第24～26曲。
- (54) 『神曲』『天国篇』第27～29曲。
- (55) 『神曲』『天国篇』第30～33曲。
- (56) 『神曲』『天国篇』第31曲112-142行、第32曲28-33行。ヨハネ黙示録では「聖母マリア」は登場しないが、カトリック的解釈では黙示録12章の天上の女性をマリアと同一視し、プロテスタント的解釈では同じ女性を教会と解釈する。いずれにせよ、ヨハネ黙示録の天上の世界で重要なのは、天上の女性ではなく犠牲の小羊として象徴されるキリストである(4-5、7、14、19章)。さらにヨハネ黙示録17-18章では、地上のローマ帝国が大淫婦として、19・21章では天上の神の国が花嫁として、女性のイメージで登場する。
- (57) 『神曲』『天国篇』第4曲22-24行。
- (58) 『書簡集』13・5-16、中山昌樹訳『帝政論・書簡集』(ダンテ全集第8巻)新生堂、1924年(復刻版、日本図書センター、1995年)、389-400頁。
- (59) 『神曲』『地獄篇』第16曲128行、第21曲2行
- (60) 中山昌樹『ダンテ神曲の研究』(ダンテ全集第10巻)新生堂、1924年(復刻版、日本図書センター、1995年)、5-6頁。
- (61) 『神曲』『天国篇』第24曲130-137行、第33曲142-145行。
- (62) 山田耕太『銀河鉄道の夜』における死と生、79-83頁、参照。
- (63) 『六合雑誌』第132号(1891年12月)、『内村鑑三全集』第1巻、岩波書店、1981年、221-223頁。尚、このテーマは『月曜講演』警醒社、1898年、「第2章 ダンテとゲーテ」に発展(『内村鑑三全集』第5巻、岩波書店、1981年、341-358頁)。
- (64) 『国民の友』第253号(1895年6月)、『内村鑑三全集』第3巻、岩波書店、1982年、177-184頁。
- (65) 『国民の友』第265、266号(1985年10月)、『内村鑑三全集』第3巻、岩波書店、185-201頁。
- (66) 藤井武『ダンテ神曲瞥見』『旧約と新約』第32-35号(1923年)、『藤井武全集』第7巻、岩波書店、1971年、523-585頁。
- (67) 矢内原忠雄『ダンテ神曲。Ⅰ地獄篇、Ⅱ煉獄篇、Ⅲ天国篇』、『土曜学校講義』第5、6、7巻、みすず書房、1969～1970年。
- (68) 剣持武彦『キリスト教文学としてのダンテ』『受容と変容・日本文学—ダンテからジッドまで』おうふう、2000年、109-127頁、参照。
- (69) 山田耕太『宮沢賢治とキリスト教』、13-23頁、山田耕太『銀河鉄道の夜』における死と生、84頁、註4、参照。
- (70) 上田敏『詩聖ダンテ』金港堂、1901年。
- (71) 森鷗外訳『即興詩人』1902年。森鷗外訳は現在では岩波文庫に収められている。主人公の詩人アントニオはダンテの『神曲』によって詩の世界に開眼する。
- (72) 繁野天来『ダンテ神曲物語』(通俗世界文学シリーズ第10巻)富山房、1903年。
- (73) 上田敏『ダンテ神曲未定稿』修文館、1918年。
- (74) 剣持武彦『ダンテ『神曲』が近代日本人にあたえたもの』『受容と変容・日本文学—ダンテからジ

ッドまで』おうふう、2000年、128-140頁。

- (75) 石川重俊「恩師 山川丙三郎」セリタ研究所、1993年、1-32頁、同「山川丙三郎訳ダンテ『神曲』及び『新生』」『東北学院英学史年報』第15号（1994年）、1-52頁、参照。新発田（加治川村）出身の山川丙三郎については、別に稿を改めて論じる予定である。
- (76) 山川丙三郎訳『神曲・地獄篇』警醒社、1914年、『神曲・浄火篇』警醒社、1917年、『神曲・天堂篇』警醒社、1922年。これらは現在では『ダンテ神曲—地獄、—浄火、—天堂』（岩波文庫、上・中・下巻、1957年～58年）に収められている。また、初版（1914-22年）の復刻版が大空社（1993年）から出されている。
- (77) 中山昌樹訳『神曲・地獄篇、煉獄篇、天国篇』洛陽堂、1917年。一卷本の中山昌樹訳『ダンテ神曲』洛陽堂、1922年。
- (78) 中山昌樹訳『ダンテ全集』全10巻、新生堂、1924-25年（復刻版、日本図書センター、1995年）。矢内原忠雄の『ダンテ神曲講義』は中山昌樹訳に基づいている。剣持武彦「中山昌樹全訳『ダンテ神曲』解説」中山昌樹『ダンテ神曲の研究』『ダンテ全集』第10巻、復刻版、日本図書センター、1995年、巻末解説、1-15頁、参照。
- (79) 黒田正利『ダンテと其時代』警醒社、1921年、京都文学会篇『ダンテ研究』星野書店、1921年。
- (80) 生田長江訳『ダンテ神曲』（世界文学全集第1巻）新潮社、1929年。
- (81) 竹友藻風訳『ダンテ神曲』（世界文学全集学生版）河出書房、1952年。
- (82) 平川祐弘訳『ダンテ神曲』（河出世界文学全Ⅲ-3）河出書房新社、1966年。
- (83) 三浦逸雄訳『ダンテ神曲』角川文庫、1968年。
- (84) 野上素一訳『ダンテ神曲』（筑摩世界古典文学大系第11巻）筑摩書房、1973年。
- (85) 寿岳文章訳『ダンテ神曲、地獄篇、煉獄篇、天国篇』、1974-76年。寿岳文章訳『ダンテ神曲』（集英社版世界文学全集2）集英社、1980年（新版1987年）。